

風の前奏曲

2005(平成17)年9月30日鑑賞(東宝東和試写室)

★★★★



監督・製作・脚本・編集=イッティスーン・ウィチャイラック/出演=アヌチット・サパンポン/アドゥン・ドゥンヤラット/アラティエー・タンマハープレーン/ナロンリット・トーサガー/ボンバット・ワチラバンジョン/プワリット・プンプアン (東宝東和配給/2004年タイ映画/106分)

……『冬ソナ』が日本で韓流ブームを生み社会現象となったように、2004年2月タイで1つの社会現象となったのがこの映画。タイの实在の楽聖ソーン師の若き日とその最後の姿を史実に即してドラマティックに描きながら、木琴のような「ラナート」という楽器をメインとした音楽映画がコレ。素朴な音を出す単純な楽器ながら、その演奏の迫力は圧巻！『マッハ！』(03年)で本場ムエタイを日本に紹介したタイ映画が、今度は「ラナート」で伝統的タイ音楽を紹介してほしいもの。しかし中国の「二胡」のように、うまく日本に広がるかな……？

第4章

いろいろな勉強になります

主人公は？

この映画の主人公はラナート奏者のソーン・シラパバンレーン師（正確にはルアン・プラディット・パイロ=ソーン・シラパバンレーン師）。国民的尊敬を集めタイの楽聖ともいえるべき彼は当然、实在の人物（1881～1954年）で、その実話を映画化したのがこの作品。

映画の冒頭には、幼少期のソーン君と死の床にあるソーン師（アドゥン・ドゥンヤラット）の姿が描かれるが、メインとなる青年時代のソーン師を演ずるのは、今年10月公開の三島由紀夫原作の日本映画『春の雪』（05年）でシヤム国から日本へ留学中の王子役として登場した、アヌチット・サパンポン。

ラナートとは？

パンフレットによれば、ラナートとは、「心を癒す」という意味のタイの古典楽器で、船の形をした共鳴箱に21～22枚の音板を並べた木琴をいうらしい。左右の手で演奏するのも木琴と同じようにばちを使うが、このばちには激しい音を出すマイケンと韻律美しく柔らかな音を出すマイヌアムとがあるとのこと。そこまで難しいことはわからないが、後述のようにこの映画でラナートの演奏を聴いていると、心が癒されるというよりも、その迫力に圧倒されるはず……。

「社会現象」あれこれ……

爆発的に日本（のオバさま族）に広がった『冬ソナ』ブームは、またたく間に日本国を席卷し、韓流ブームは日本の1つの社会現象になった。本日の試写室におけるこの映画のパンフレットには、白田麻子氏による「『風の前奏曲』が社会現象になった日——2004年2月29日 H.P.連動型ファンイベントが開催されるまで——」と題する解説が1枚はさまれていたが、そこには、この映画がタイにおいて社会現象となった様子がイキイキと描かれているので、是非注目を……。

この映画の魅力その1—ドラマ性

大東亜戦争（太平洋戦争ではない！）を戦っていた当時の日本人は、中国はもちろん、インドやベトナムそしてタイなどの地理的關係や、それぞれの国の状況などをある程度頭に入れていたはず……？ しかし戦後60年間平和が続く中、朝鮮戦争はもちろんベトナム戦争すら「対岸の争い」として見てきた日本人は、「あの戦争」前後から今日に至る東南アジアの国々の動きをほとんど知らないのでは……？

こういう私自身も、このような東南アジアの国々の歴史をほとんど知らないが、それを勉強するには映画やミュージカルが一番。劇団四季の「昭和の歴史3部作」のラストを飾る『南十字星』はインドネシアのオランダからの民族独立運動を舞台としたものだし、映画『ムルデカ』（01年）もインドネシアの独立に貢献した日本人兵士の姿を描いたもの。そういう目でタイを見ると、日本人が知って

いるタイは、山田長政とシャム国、そしてミュージカルの『王様と私』だけ……？

もっとも、日本の高度経済成長時代におけるタイは、日本にとって重要かつ安定した市場として大きな役割を果たしていたことは、多くの団塊世代の商社マンたちはよく知っているはず……。さまざまな目でこの映画を観ると、19世紀末のシャム国の時代から第2次世界大戦へ、そしてタイ国が近代国家として自立していく中で、古き良き伝統といかなる確執をもちながら闘っていたかということがよくわかり、ドラマ性がいっぱい……。

この映画の魅力その2—音楽性

この「ラナート」という楽器の原理は、とにかく木琴そのもの。したがって、この楽器をうまく弾いてもたかがしれたものだと考えていたが、それは大まちがひ。まず冒頭に幼少期のソーン君がいたずら半分にラナートを弾くシーンが登場するが、その音を聴いただけでも、「あっ」と思うはず……。そしてストーリーの展開につれて少しずつ「ラナート」が奏でる音楽の魅力が紹介されていくが、この映画の音楽性の高さを示す圧巻は、何といってもラナートの巨匠、クンイン（ナロンリット・トーサガー）とソーンとの競演会。

音楽好きのタイの親王の前で、まずはクンインを中核とした楽団のすばらしい演奏が……。そのすばらしさに圧倒されたソーンは、一度は失敗してしまうものの、親王のやさしい再チャレンジの声に甘えて、2度目はすばらしい演奏を……。こうなると、興の乗った親王は2人によるソロの勝負を命じたが、まさにそれは命懸けの大勝負！ この2人のソロ決戦を観るだけでもこの映画を鑑賞した価値あり、といえるもの……。

タイの近代化への模索は？

19世紀末から20世紀にかけて欧米列強諸国からの侵略の危機にさらされていたタイ国は、第2次世界大戦の前後を通じて、王政から民主主義国家に移行しようとしていた。当時の国王はラーマ8世。もっとも民主主義といっても、事実上は軍事政権に近いものだったようだ。パンフレットの中にある、イッティスラント

ーン・ウィチャイラック監督の語りによると、その当時のスローガンは「指導者を信ずれば、国家の危機を乗り越えられる」というもので、現に映画の中でもこのスローガンが、若手軍人の口で語られている。そして当時のタイの指導者は、「タイ国も欧米諸国と同等の文明があることを示すことが侵略を防止する有効な手段である」と考え、従来のタイの文化をすべて欧米文化に改めようとしたらしい。これはある意味滑稽かもしれないが、考え方としてはよくわかるもの。しかしその考え方が音楽や芸術まで及ぶと……？

文化を規制する条例の是非は？

中国の毛沢東を指導者として、1966～1977年の11年間にわたって中国を吹き荒れた文化大革命は、数々の悲劇を生んだが、タイも規模こそ違え、それと同じようなことをしていたようだ。それは、「欧米文化こそが文明であり、タイ文化は未開で遅れている」という価値観にもとづくもので、そのため従来の伝統的な音楽や芸術を規制する条例が制定され、日常レベルから始まりすべての文化が分類された、とのこと。音楽に対する規制は、

①たとえば地面に座って演奏することの禁止

②舞台、作詞・作曲に関する当局の検閲

③演奏するためには芸術局で試験を受け、演奏許可証が発行されなければ、公の場での演奏が許されない

など。今になれば、こんな規制がナンセンスなことは当然だとわかるものの、当時はこれが平然とまかり通っていた時代。これは中国でも日本でもある時期同じようなものだ。そして映画の中で、この条例の正当性を信ずる若手軍人が登場するが、そのボスであるウィラ大佐（ポンパット・ワチラバンジョン）は……？

また、この規制に公然と抵抗したテュート（プワリット・ブンブアン）は……？

そして、こんなイヤなご時世の中で晩年を迎えたソーン師がとった行動は……？ こんな国家権力の規制と芸術家という視点からもソーン師を評価してみよう。

ムエタイ映画と音楽映画

インドが映画大国であり、質・量ともにすぐれた映画を輩出していることはよ

く知られているが、タイ映画はまだ日本では少数。『マッハ!』(03年)、『シネマルーム6』194頁参照)が日本で予想以上に大ヒットしたが、これは日本ではK-1やPRIDEなどの異種格闘技戦でタイの「ムエタイ」が市民権を得ていることが背景にあったため……?

私はミュージカルや音楽映画が大好きで、映画化された『オペラ座の怪人』(04年)には大感激したものだが、逆に音楽映画はキライという人も結構いるはず。そんな中、日本人が誰も知らないであろうタイの木琴「ラナート」とその奏者ソーン師を描いたこの映画が、日本で受け入れられるかどうかはかなり微妙……。私としては『マッハ!』ブームとまではいなくても、それなりにヒットしてほしいと願っているが、大阪での上映は「テアトル梅田」だけ。その健闘ぶりに注目するとともに、私なりに精一杯の応援をしたいものだ。

2005(平成17)年9月30日記

ミニコラム

名画をもっと観たい! 頑張れミニシアター

06年3月22日付産経新聞は、「『名画座』また一つ消える」と題して、名画の3本立てにこだわってきた老舗映画館「新世界公楽劇場」の閉館を報じた。私も1度だけ、新世界の映画館で3本立て1000円の名画を観たが、そんな映画館が1つまた1つと消えていくのはさびしい限り。他方、なお続く韓流人気と新たな華流ブームのおかげで、3月オープン of 東京「シネマート六本木」に続き、大阪でも4月15日、西日本初のアジアン・シネマ専門館「シネマート心斎橋」が誕生した。その最初

の企画は「韓流シネマフェスティバル2006」。また東京では、「ニコール・キッドマン命です」と語る内藤篤弁護士が、名画座への思いから、何と自ら映画館経営に乗り出した。その名は「シネマヴェーラ渋谷」。2足のわらじをしっかりと履き続けてもらいたいものだ。名画ファンとしては、失われていくものを悲しむだけでなく、新たに生まれるこれらのミニシアターに頑張ってもらいたいもの。そして、いつか俺だって……?

2006(平成18)年4月19日記